

## II まぐろ漁船船員の家族に関する研究

### 目 次

まえがき	116
A 調査の概要	
B 被調査者の属性	
C 家族の状態	
D 夫の就労状態	
E 経済生活	
F 漁船船員の妻の意識	
G その他	
むすび	

### まえがき

遠洋漁業といわれる漁種は約10種程あるが、もっともその特徴をそなえているのは遠洋まぐろ漁業だといってよい。まぐろは生棲海域が非常に広く、年間操業が可能であり、魚価も比較的よい等によって戦後急速にのびた漁種である。

このような条件をもったまぐろ漁船について、労働の実態、船内設備、安全設備および積込食糧の調査を行なうとともに、長期出漁の漁船においては、特に人間関係の重要性を認識し、この方面の調査も2カ年に亘って行なった。

更に人間関係の背景には家族の漁業に対する考え方が大きな影響力をもっていることを痛感し、家族関係、家族の生活の実態、家族の職業意識等について調査を行なうとともに、海難防止に対する心がまえ等について究明しようと、この調査を行なった。

### A 調査の概要

#### 1. 調査方法

婦人会を通じて調査表を対象家族に配布し、各家庭で記入後密封の上、婦人会役員に回収してもらう方法を取り、更に座談会方式を併用した。なおC地域についてはインタビュー調査を行なった。

#### 2. 調査対象地の選定

調査対象の3地区の選定については、既に対象地として2～3の調査を行なったA、B両地域と、漁船船員の給源地として名のあるC地域をこれに加え、主婦の漁業に対する考え方や生活のあり方を比較しようとしたものである。

### B 被調査者の属性

#### 1. 年 令

被調査者の年齢は表-1 にしめすように3地域とも30才台が多いが、C地域にのみ45才台の高年齢者が多くみられる。

#### 2. 妻の学歴

表-2 にしめすように3地域で差がみられ、旧制女学

表-1 妻の年齢

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
20～24					5	3.1
25～29	4	11.4	5	9.3	18	11.2
30～34	9	25.7	11	20.4	30	18.8
35～39	12	34.3	19	35.1	40	25.0
40～44	10	28.6	12	22.2	32	20.0
45～49			4	7.4	18	11.3
55～54			3	5.6	8	5.0
55～59					2	1.2
60～64						
不 明					7	4.4
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-2 妻の学歴

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
小学校卒	1	2.9	2	3.7	12	7.5
高等小学校卒	13	37.1	21	38.9	46	28.7
中学卒	5	14.3	9	16.7	41	25.6
高校卒	9	25.7	12	22.2	19	11.9
不 明	7	20.0	10	18.5	42	26.3
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-3 妻の職業

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
農 業			6	11.1	77	48.1
そ の 他	1	2.9	23	42.5	12	7.5
な し	18	51.4	5	9.3	34	21.3
内 職 (含パート)			3	5.6		
不 明	16	45.7	17	31.5	37	23.1
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

校及び新制高校卒業者がもっとも多いのはA地域であった。C地域で学歴不明が全体の1/3をしめているのか特徴的である。

### 3. 妻の職業

C地域は約半数が農業に従事している。夫は漁船に乗り、家に残った者は漁業権をもつ場合には、解禁日には沿岸漁業に出、そのほかの日には自家用の野菜、麦などを作っている。

このC地域に対してAは農業従事者は全くおらず、Bは無職は少ないが農業以外の職業、おもに水産加工等に従事しているものが多い。このように妻の職業は3地域で非常に異なった傾向をみせている。

## C 家族の状態

### 1. 家族形態、家族数

一般に家族形態は、夫婦と子供からなる小家族と、そのほかに、その親、夫婦の兄弟などか一緒に生活している大家族とに分けられる、今回の調査地域にはA地域では小家族、B、C地域では大家族が多い。

表-4 家族形態

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
大家族	6	17.1	29	53.7	98	61.3
小家族	29	82.9	25	46.3	61	38.1
不明					1	0.6
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-5 同居家族数

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
2人	5	14.3			3	1.9
3人	6	17.1	6	11.1	14	8.8
4人	12	34.3	16	29.6	29	18.1
5人	9	25.7	9	16.7	36	22.5
6人	1	2.9	13	24.1	35	21.9
7人	2	5.7	7	13.0	26	16.3
8人			2	3.7	9	5.6
9人					5	3.1
10人			1	1.8		
11人					1	0.6
不明					2	1.2
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-6 一世帯における子どもの数

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
なし	5	14.3	2	3.7	15	9.4
1人	6	17.1	8	14.8	29	18.1
2人	13	37.1	30	55.5	50	31.2
3人	10	28.6	7	13.0	46	28.8
4人			3	5.6	16	10.0
5人	1	2.9	2	3.7	3	1.9
6人			2	3.7		
不明					1	0.6
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

このような家族形態のちがいは、当然家族数にも影響してくるが、しかし子供の数では3地域の差はみられず、2人が多い。

これらの地域における家族形態の差は、地域における経済構造のちがいが影響していると考えてよい。

C地域は、漁業を主にし、かたわら、農業を営んでいる家族が多い地域であり、沿岸漁業に従事するためには漁業権の所有が条件となる。しかも、沿岸漁業には船が必要であること1漁業権での出漁人数には制限がないこと、それらの作業は人手が多いほど有利なこと、農業にしても、小家族として分家するにつれて耕地が少く分割されることなどから、大家族制がより有利な条件になっている。一方、Aの場合は、遠洋漁船の港としての役割を果たしている地域であり、家族も、漁船員家族として、より便利な生活を営むために、移住してきていると思われる。C地域では長男はそこに残るが、漁船員になった次男でA地域に移住している例がいくつかみられた。その場合には、長男が大家族制の中で家をつぎ親を扶養していくのが一般的であるから、次三男は夫婦と子どもからなる小家族を形成することになろう。

BはAとC地域の両者の性格をもった地域であり、Cと同様に船員供給地であったが、ほとんどが地元の船に乗っており、その点県外にまで進出しているC地域の船員と異なっている。さらにB地域が漁港として発展するに従って、地元以外の船員も集ってき、しだいにA地域的傾向が加味していった。したがってB地域はA、及びCの両地域の性格をもっているものと考えられる。

調査対象となった家族の夫の年齢は、3地域とも35才から44才が多い。C地域はA、B地域と比較して、若年齢層も多いと同時に高齢層も多い傾向がみられる。

2. 家族の教育水準

夫の学歴はA地域では水産高校も含めて高校卒以上がもっとも多く、ついでB地域、C地域の順になっている。一般に、学歴水準は低年齢層ほど上昇しているから、3地域における年齢構成の差が影響すると思われる。

表-7 夫の年齢

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
20~24						
25~29	2	5.7	1	1.8	12	7.5
30~34	3	8.6	5	9.3	22	13.7
35~39	12	34.3	16	29.6	34	21.3
40~44	12	34.3	21	38.8	35	21.9
45~49	5	14.3	5	9.3	24	15.0
50~54	1	2.8	3	5.6	16	10.0
55~59			3	5.6	7	4.4
60~64					2	1.2
不明					8	5.0
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-8 夫の学歴

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
小学校卒	2	5.7	3	5.6	16	11.4
高等小学校卒	19	54.3	29	53.6	31	22.2
中学卒	5	14.3	5	9.3	33	23.6
高校卒以上	3	8.6	2	3.7	9	6.4
水高卒	4	11.4	8	14.8	17	12.1
不明	2	5.7	7	13.0	34	24.3
計	35	100.0	54	100.0	140	100.0

D 夫の就労状態

1. 就労の形態

夫がどのような形で就労しているかは、漁業労働者家族としての生活に大きく影響することはいうまでもない。3地域を通じて最も多くみられる就労形態は図1~3に示した通りである。

このような就労状態であるから、家族がそろって生活する日数は年間で30日~60日程度が最も多く、休日として仕事を休み、家族と共に生活できる日はそれ程多くない。

2. 乗船漁船と船籍地との関係

1月 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

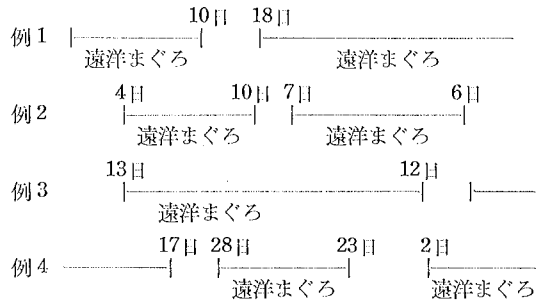


図-1 夫の就労状態—A地域—

1月 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

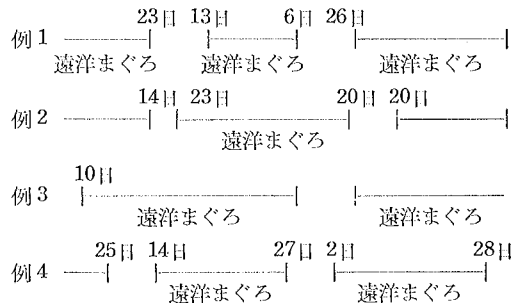


図-2 夫の就労状態—B地域—

1月 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

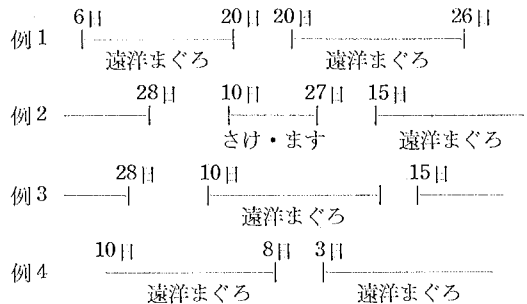


図-3 夫の就労状態—C地域—

乗船漁船の船籍地が居住地及び居住地近辺にあるのはA地域が最も少く、B地域が最も多い。また船籍地が県外なのはA地域は65%で非常に多いが、B地域には全くみられない。

この結果から、C地域が地元のみならず、全国的な漁船船員の供給源としての性格をもっていることがわかるが、B地域の場合は、まったく地元漁船船員の供給源としての意味が大きい。これは、地元漁業の漁船員にたい

する需要と地元出身の船員数との関連と同時に、その土地の漁船船主の漁船員にたいする待遇、漁船の設備なども関連してくる。この結果からC地域は他県の漁船員の供給源としての性格をもち、A地域の場合には需給地としての傾向が強いことがわかる。

### 3. 船主との関係

船主と親戚関係にあるのはB地域が最も多い。

同じ船に乗っている乗組員のうち、親戚関係にあるものかいるのは(表-11) B地域に最も多く、これと対象的なのがA地域である。これはB地域がほとんど地元の船主の船に乗っているのに対して、他の2地域では他地域の船に乗るものが多いことが影響していると考えられる。

### 4. 夫の役職について

夫の従事する職種は、A地域はB、C地域と比較して機関長、漁労長が多く、B地域でも職員が多かったが、

表-9 船籍地

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
地元港内	8	21.6	49	90.7	95	57.9
その他	2	5.4	4	7.4	9	5.5
不明	24	64.9			53	32.3
不明	3	8.1	1	1.9	7	4.3
計	37	100.0	54	100.0	164	100.0

表-10 船主との関係

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
あり			21	38.9	14	8.8
なし	24	68.6	10	18.5	65	40.6
不明	11	31.4	23	42.6	81	50.6
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-11 親戚関係

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
あり	4	11.4	26	48.1	25	15.6
なし	25	71.4	13	24.1	68	42.5
不明	6	17.2	15	27.8	67	41.9
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-12 夫の役職名

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
漁労長	10	27.0	10	17.9	22	13.7
船長	5	13.5	8	14.3	14	8.7
機関長	10	27.0	7	12.5	19	11.9
通信士	1	2.7	7	12.5	7	4.4
職員	1	2.7	8	14.3	3	1.9
部長	3	8.1	5	8.9	17	10.6
部員	6	16.3	7	12.5	59	36.9
不明	1	2.7	4	7.1	19	11.9
計	37(2)	100.0	56(2)	100.0	160	100.0

Bでは船長・漁労長を兼ねるもの2。

表-13 夫の実家の職業

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
漁業	13	36.1	32	59.3	122	72.5
農業	11	30.6	4	7.4	10	6.0
商人	1	2.8	2	3.7	7	4.2
勤人	3	8.3	1	1.8	2	1.2
その他	3	8.3			1	0.6
なし	3	8.3				
不明	2	5.6	15	27.8	26	15.5
計	36	100.0	54	100.0	168	100.0

表-14 漁船員になったきっかけ

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
父が船に乗っていた	4	11.1	24	37.0	61	35.4
兄弟が船に乗っていた	7	19.4	9	13.8	18	10.5
船主が親戚だった	1	2.8	14	21.5	13	7.6
家が船主だった			2	3.1		
家族にすすめられて			1	1.5	19	11.0
友人にすすめられて	6	16.7	1	1.5	5	2.9
その他	14	38.9	10	15.4	17	9.9
不明	4	11.1	4	6.2	39	22.7
計	36	100.0	65	100.0	172	100.0

表-15 妻の実家の職業

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
漁業	13	37.2	20	37.1	96	57.0
農業	2	5.7	14	25.9	23	13.7
商勤	6	17.1	4	7.4	8	4.8
人員	7	20.0	6	11.1	7	4.2
その他	1	2.9	1	1.8	2	1.2
不明	6	17.1	7	13.0	3	1.8
計	35	100.0	54	100.0	168	100.0

表-16 家計の中で多くかかるもの

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
食費	28	63.7	30	48.5	72	39.8
交際費	7	15.9	17	27.4	37	48.1
教育費	6	13.6	11	17.7	12	6.6
その他	1	2.3	1	1.6	1	0.5
不明	2	4.5	3	4.8	9	5.0
計	44	100.0	62	100.0	181	100.0

この比率は調査対象の選定がかなり影響しているものとみてよい。

5. 夫及び妻の実家の職業の関係

漁業労働者としての家族の形成は(表-13)に示すように、実家の職業が漁業関係者であり、父親の職業との類似性および関連が大きい。

E 経済生活

1. 家族の就業状態

A, B, C 3地域の就業構造のちがいは、経済生活に直接影響し、C地域の場合には、農業をやっているため現金支出は非常に少ない。水産物は、漁業就業世帯が多いこともあって、ほとんど購入する必要もないのが現状である。A地域はほとんど現物収入はなく、一般の都市生活者と同じような経済生活である。B地域は、妻が水産関係の仕事に従事している家族が多く、いくらかは水産物の現物収入もあるが、主になるのは賃金収入である。この点ではC地域とはことなっている。

C地域の漁船員の多くは、K港に船籍地のある漁船にのっているが、一般的な賃金形態は、最低補償本給プラス歩合給であり、まだ、完全な歩合給制をとっていると

ころもある。

これらの賃金形態、家族形態、就業構造などが3地域の経済生活に相当影響し、それぞれ特徴をあらわしている。

F 漁船船員の妻の意識

1. 結婚当時、漁船員の夫の職業についてどう感じたか

「漁船船員の夫と結婚した当時、夫の職業についてどう思ったか」という問に対する回答数は(表-17)に示した通りである。これに対して具体的に理由が記入されていたものを整理したのが(表-18)であって、比率ではB, C地域がよく似ている。

2. 現在夫の職業に満足しているか

結婚して何年か経ち、留守家族のいない手としての立場から、身をもって感じていることはどういうことであるか、その問題についても記入して貰った。

これをみると3地域ともその比率の差はかなり著しく、特にB地域の差が大きい。表-18は表-17の数字の具体的な理由を現したものである。

表-17 結婚当時の夫の職業に対する感想

	A		B		C	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
よいと思った	5	14.4	16	29.6	43	26.9
いやだと思った	3	8.6	9	16.7	22	13.8
不明	27	77.1	29	53.7	95	59.3
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-18 結婚当時の夫の職業について感じたこと

		A	B	C
		%	%	%
よいと思った	男性的だと思った	3	6	2
	最高の職業だと思った			
	生甲斐のある仕事と思った			
	好ましいと思った			
あまり考えなかった	別に何とも思わなかった	6	15	2
	あまり抵抗を感じなかった			
	その当時は航海日数が少なかったからよかった			
	男の職業と思った			
	職業そのものはよいが、出漁期間が短いとよい			
	自分が選んだ道だからよいと思う			
	父兄が漁船員なので何も考えなかった			

いやだと思った	航海日数が長いあまりよい感じがしなかった	3	13	6
	家で淋しい思いで待つ身の辛いこと、とても目に出していい現し方がない			
	いつも留守なのでやめてほしいと思った			
	家にいる日数が少くて大変困った			
	1日も早く生活の土台を作り、下船してもらおうことばかり考えた			
	収入が一定しないし、無事故を祈る毎日がやりきれなかった			
	生活の安定した船に乗ってほしかった			
	生活が安定していない			
	生命をかける職業でみじめに感じた			
	危険だと思った			
	つくづくいやだと思った			
	よい職業ではないと思った			
	悲しい職業だと痛感した			
	仕事の割に価値が評価されず、沖と陸とでいつも安否をきづかい、あまり感心した職業と思わなかった			
	生活のため仕方がないとあきらめ、無事を念じた			

表-19 現在夫の職業に満足しているか

	A		B		C	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
漁船船員でよい	3	8.6	10	18.5	29	18.1
漁船船員で困る	13	37.1	44	81.5	63	39.4
意見なし	10	28.6			3	1.9
不明	9	25.7			65	40.6
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-20 夫が漁船船員でよいか否か

		A	B	C
		%	%	%
漁船船員でよい	経済的にらく 入港時は1時に金が入る こづかいを十分使わせてもらえる 食費、衣料費がかからない 最低保障がある	6	17	17
	食事の心配その他の世話の心配のないこと 自由な時間がある 何でも自分の考えのまま行なえる 全日海にも入会しているから安心	3	2	1

漁船船員のため困る	相談ごとがあったとき	14	56	22
	家族の病気やけがのとき			
	火事、水害等の不安及び災害のあったとき			
	親類や近所に不幸があったとき			
	男でなければならない仕事のあるとき			
	急に大金が必要になったとき			
	責任が重い			
	出漁中は連絡がつきにくい			
	子供の将来のことが相談できない			
	子供に淋しさを訴えられたとき			
	子供が成長するに従い父親を必要とする			
	子供がわがままになりがち			
	父親の愛情を知らない			
	父親になつかない			
	家庭的に恵まれない			
家族がはなればなれでいや				
長期航海で逢うことができず淋しい				
入港口数が短い				
心配するばかりで困る				
航海日数が定まっていないこと				
下船後の生活保障	2	6	3	
50才近くなったらやめてほしい				
老後が心配	2	6	4	
漁労長で気苦労が多い				
経済的安定がない	2	6	4	
生活が不安定になりがち				
あきらめている	2	6	1	
船員保険の使用期間延長				

表-21 夫の職業に対する意見の推移

		結婚当時			現在		
		A	B	C	A	B	C
		%	%	%	%	%	%
よい	い	14.3	29.6	26.9	8.6	18.5	18.1
	いや	8.6	16.7	13.8	37.1	81.5	39.4
	意見なし				28.6		1.9
	不明	77.1	53.7	59.3	25.7		40.6
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

3. 夫に対して漁船船員の継続を希望するか

現在の生活に対する評価の結果として(表-22)にしめすような結果が出た。これをA, B, C 3地域を比較してみるとC地域が「現在のままでよい」と現状の生活を肯定している妻が最も多い。

A地域の漁船員は、乗船している船も大きく、しかも近代化された労使関係をとっているところが多いにもかかわらず、漁船員に対する否定がつよく出ていることは大きな問題である。C地域では他の地域にみられない自営漁業希望者が約9%もいる。

これらの結果から、労働条件などと同時に居住地域の状態、とくに漁船員にたいする評価が現在の生活にたいする評価につよく影響しているといえる。

表-22 夫の職業に対する将来の希望

	A		B		C	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
陸上の他の仕事	25	69.4	24	44.4	53	32.5
自営漁業					14	8.6
汽船に乗ってほしい	1	2.8			2	1.2
他の漁種の船	1	5.6	2	3.7	6	3.7
現在のままでよい	2	13.9	19	35.2	69	42.3
不明	3	8.3	9	16.7	19	11.7
計	36	100.0	54	100.0	163	100.0

4. 子供は漁船船員になってほしいか

a. 男の子は漁船船員にしたいか

上記のような自分の体験から、男の子または女の子をもつ母親は、子供が成長したら父親のあとをついでほしいか、または女の子は漁船船員と結婚させたいか、ということについて答えてもらった。(表-23)

この結果でもA, B, C 3地域の差がはっきり現れ、特にA地域では漁船船員にしたいという望みをもつ母親

表-23 男の子は漁船船員になってほしいか

	A		B		C	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
漁船船員になってほしい			4	10.8	24	22.4
漁船船員にしたいくない	16	69.6	22	59.5	35	32.7
わからない	7	30.4	11	29.7	48	44.9
男の子をもつ母親の数	23	100.0	37	100.0	107	100.0

が1名もいないことは特徴的である。(表-24)はその理由であるが、更にこの回答をよせた母親を年齢別に分類してみると(表-25)の如くで、C地域で結婚したと思われる20~24才台の妻に、「したくない」という意見が出ていていることは、C地域が漁船船員の給源地であるだけに注目に値する。

表-24 男の子は漁船船員になってほしいか

		A	B	C
漁船船員になってほしい	収入が多いから 遠洋漁業でなくては生活が立たない 本人も早く自信が付き生活面でもに役立つから	%	%	%
	父のあとつぎになってほしい 男と生れた以上、1度は海に出てほしい 子供のときから海が好きだったから 木を食う虫は木を食わなければならない		7	2
漁船船員にしたい	家族と一緒に暮してほしい 妻や子供に淋しい思いをさせたくない 家庭的に恵まれない 家族との関係がうすくなる いつも留守では心細く、不自由な生活のため 陸の上で親子そろって苦勞の方がよい	11	17	7
	安定した職業につかせたい 航海が長期で仕事の負担が大 危険な職業だから 海の生活がかわいそうだから 労働も、精神的にも大変	9	9	8
ない	収入が不安定 重労働の割に収入が少ない 老後の生活が不安定	3	13	2
	漁師上りは役に立たなくなる人間が多いから 世の中のことを知らなくなる 子供の教育や家庭のことを主婦にまかせきりで、男としての価値が金をとるだけになってしまう 生活を犠牲にして働いても社会的に恵まれない		1	2
	体が丈夫でないから 主人がすすめない	3	2	

表-25 年令別にみた子供の就職に対する  
母親の希望

	漁船員になってほしい			漁船員にしたくない		
	A	B	C	A	B	C
20～24才						2
25～29		1		1	2	5
30～34		1	2	4	3	7
35～39		1	6	6	10	9
40～44		1	5	5	6	8
45～49			5		1	2
50～59			3			1
不明			3			1
計		4	24	16	22	35

表-26 女の子は漁船船員と結婚させたいか

	A		B		C	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
結婚させたい			2	4.4	7	6.4
結婚させたくない	16	66.7	22	48.9	33	30.0
わからない	8	33.3	21	46.7	70	63.6
女の子をもつ母親の 数	24	100.0	45	100.0	110	100.0

表-27 女の子は漁船船員と結婚させたいか

	A	B	C
嫁にやりた い	%	%	%
淋しい割に香気などところもあり、 船の人は純情だから いつも新婚気分 経済的に恵まれた生活ができる 幹部にやりたい		4	2
嫁にや りた く な い	10	15	8
自分が淋しい思いを経験している からやりたくない 陸上の職業なら何事も相談できる から 1年のうち何日も一緒に生活でき ないから 留守がちだから 家庭が淋しいから 家庭での責任が大き い 1人でいろいろ苦労させたくない 朝出て夕方帰ってくる人に			
収入が安定していない サラリーマンの方が生活が安定し ている 老後の生活が不安定		13	10

危険だから 毎日心配がたえない			8
--------------------	--	--	---

表-28 年令別にみた子供の嫁ぎ先に対する  
母親の希望

	漁船員にやりたい			漁船員にやりたくない		
	A	B	C	A	B	C
20～24才						1
25～29				1	2	5
30～34			1	4	4	9
35～39		2	3	5	8	10
40～44			1	6	7	5
45～49			1		1	2
50～59			1			1
不明						
計		2	7	16	22	33

b. 女の子は漁船船員と結婚させたいか

女の子を持った場合、漁船船員と結婚させたいか否かの答は(表-26)に示すように、A地域では男の子と同様に希望者が少ない。「わからない」という回答は、男の子の場合も女の子の場合も本人の意志によるほかはないという意味である。

G その他

1. 出漁時の希望、出漁中の妻の心構え

夫が出漁するときの妻の希望は地域にかかわらず、第1位は航海の安全、第2位は健康、第3位は無事故、大漁である。無事故を航海の安全に含めてとらえると、A地域は52.6%、B地域は47.8%、C地域は54.1%

地域を問わず無事故で無事に航海をおえるのは漁船員の妻の最大の希望といえる。そうして収入に関係する漁獲については大漁であるようにという希望はAで3.4%、Bで12.4%、Cで13.1%でとくにA地域は非常に少ない傾向がみられる。

このように、漁船も海難が多いだけに無事故で健康な身体で帰ってくることを漁船員の妻たちはもっとも希望している。

2. 相談相手

夫が長い航海に出て行くと、家庭内の種々な問題が留守をあづかる主婦の肩にかかってくる。そのときにもできるだけ夫に知らせずに自分の力で処理しようとする姿



勢をもっている人が多い。それだけに相談相手は一般家庭と比較にならぬほど重要性をもっている。

相談相手は(表-31)に示したように3地域とも親戚が最も多いが、船主に相談という点ではA地域とB、C両地域とは異った傾向をしめしている。

表-29 出漁のときのぞみ

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
健康	25	42.3	34	30.1	51	25.8
大漁	2	3.4	14	12.4	26	13.1
出漁期間			11	9.7	9	4.5
航海の安全	23	39.0	40	35.4	73	36.9
無事故	8	13.6	14	12.4	34	17.2
その他					1	0.5
不明	1	1.7			4	2.0
計	59	100.0	113	100.0	198	100.0

表-30 夫の出漁中心がけていること

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
家族の健康	28	46.6	45	40.6	134	48.0
経済のやりくり	16	26.7	24	21.6	54	19.4
貯金	4	6.7	9	8.1	22	7.9
親戚のつきあい	6	10.0	15	13.5	24	8.6
隣近所のつきあい	6	10.0	16	14.4	28	10.0
不明			2	1.8	17	6.1
計	60	100.0	111	100.0	279	100.0

表-31 相談相手

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
船主	1	2.8	21	28.8	28	15.4
親戚	26	72.1	44	60.2	124	68.4
漁協の職員	1	2.8	1	1.4	1	0.6
近所の人	5	13.9	5	6.8	18	9.9
その他	1	2.8	1	1.4	1	0.6
なし	1	2.8				
不明	1	2.8	1	1.4	10	5.1
計	36	100.0	73	100.0	182	100.0

### 3. 面会についての希望

留守家族にとって、夫が長期出漁を終えて日本に帰ってくるということは、何ものにもたえられぬ程の喜びであり、殊に若妻の場合には、夫が帰った折に入港地に面会に行けることだけを唯一の楽しみに、留守中は舅、姑につかえているのである。それにもかかわらず種々な制約のため、その望みが達せられないということは、前述したように淋しいという感じだけでなく、家族に漁業拒否の感じを抱かせる大きな原因ともなりかねない。

特に問題としたいのは、経費の面もさることながら、留守番がない、老父母の面倒をみるものがないという理由で面会にゆけないことで、これらの諸問題について関係者は積極的に対策を構じる必要がある。

### 4. 安全施設について

夫の職業がある程度危険性をもつものであることは主婦は十分認識をし、危険な職業だという意識さえもっている。それだけに夫の乗っている船の安全設備に対して関心をもつ度合いも高い。

表-32 面会についての希望

	A	B	C
船員保険寮は突然行っても入れてくれない (10日前に連絡しなければならない) 船員保険寮は空室があっても1週間で出なければならない 面会地の宿舎の様子がわからないで困る 会社の寮がないので会社で宿舎をとってほしい 経費がかかりすぎる	11		3
宿舎の設備が悪い 入港したら船員が十分休養できるようにしてほしい	3		2
留守番がいなくて面会にゆけない 父母が年老いているので面会にゆけない			2

表-33 漁船の安全設備を知っているか

	A		B		C	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
知っている	23	65.7	46	85.2	142	88.7
知らない	12	34.3	8	14.8	18	11.3
計	35	100.0	54	100.0	160	100.0

表-34 安全設備に対する認識

	A		B		C	
	実数	%	実数	%	実数	%
レ ー ダ ー	17	48.6	42	77.8	83	79.0
ロ ラ ン	11	31.4	24	44.4	68	64.8
無 線					85	81.0
無 線 電 話	4	11.4	8	14.8	48	45.7
ラ ジ オ プ イ	18	51.4	35	64.8	78	74.3
膨 脹 い か だ	15	42.9	10	18.5	70	66.7
ラ イ フ ジ ャ ケ ッ ト	13	37.1	18	33.3	51	48.6
消 火 器	18	51.4	36	66.7	83	79.0
そ の 他			3	5.6	4	3.8
不 明	12	34.3	8	14.8	15	14.3
調 査 対 象 人 員	35		54		105	

注 比率は調査人員を100.0%とした各々の設備に対する比

具体的に、夫の乗っている船にはどのような種類の安全設備があるのかをみると、(表-33)のように比率の高いものと低いものの差が相当大きく、A、B2地域に比べてC地域の主婦にその比が高い。

それにしても家族がこのように安全に対する認識をもつことは、漁船船員自身にも再認識をさせる刺戟となる。従って安全教育は当事者だけではなく、家族にもその知識を十分に把握して貰うことが必要であり、それは海難

防止に大きく役立つことと考えられる。

### む す び

留守家族の問題に対して表面をなでただけの調査にすぎなかったが、われわれが相像する以上に留守家族の、特に主婦の考え方は種々の面で船員の労働意欲につながり、生産性の向上につながり、海難にもつながっていることは、いなめない事実である。

また相談相手がないということ、あってもその地域の関係者が多いために世間体や家の事情から、心底を打ち割って相談できない場合もあり、それが最も大きな悩みであることがこの調査で明らかになった。にもかかわらずこの3地域を含めてどの地方に行っても、留守家族の相談にのるという対策を講じているところはなかった。健全な留守家族を作るため、船員が安心して働けるためにも早急に相談に応じられる施設を作るべきである。これらを含めて留守家族の問題は今後労務対策のみならず、経営面においてもないがしろにすべきでないことを痛切に感じさせられた。

(西部徹一、畠崎繁野、神田道子、山口理子、本調査は昭和43年度における海難防止協会の委託研究として行なわれたもので、遠洋まぐろ漁船船員の就労体制および労務管理と海難との関係に関する調査報告 No. 5 昭和44年3月、に所載された報告の要約である)